

St. Luke's International University Repository

Daily life experience of freshmen at a Nursing college.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 久美子, 菱沼, 典子, 佐居, 由美, 大久保, 暢子, 石本, 亜希子, 佐竹, 澄子, Ohashi, Kumiko, Hishinuma, Noriko, Sakyo, Yumi, Okubo, Nobuko, Ishimoto, Akiko, Satake, Sumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015032

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



看護大学入学生の生活体験

大橋 久美子¹⁾, 菱 沼 典 子²⁾, 佐 居 由 美²⁾
大久保 暢 子²⁾, 石 本 亜 希 子²⁾, 佐 竹 澄 子²⁾

抄 録

【目的】大学生の生活体験不足が指摘される中、学習準備状況としての看護系大学入学生の生活体験調査やその実態に合わせた教授学習方法についての研究は少ない。本研究目的は、看護大学入学時の学生の日常生活における生活体験と実際の行動の実態を明らかにし、学生の特質と要因を検討することである。

【方法】2007年4月、A看護大学1年生を対象として同意の得られた31名に対して、自己記入式アンケート調査(日常生活における生活体験と行動に関する計33の質問と属性)と実施調査(A「濡れたタオルを洗って干す」もしくはB「机まわりを片付ける」の指示に対する対象者の行動観察)を行った。分析は項目ごとの記述集計をした。倫理的配慮として、A大学倫理審査委員会の承認後、教員の強制力が働かないように教員以外の調査員が実施した。

【結果】兄弟がいる学生は83.9%、平均の兄弟人数は2.3人であった。アンケート調査では、生活経験が全員にあった項目は4項目「食器洗い(台所の片付け)」「寝前の更衣」「着物(浴衣)の着脱」「食後の口腔周囲の汚れへの関心」であり、50%未満の項目は2項目「浴槽に入るとき湯をかき回す」「子どものオムツ交換」であった。実施調査A(15名)では、ほぼ全員がタオルをねじって絞り、しわを伸ばして、まっすぐに干した。実施調査B(16名)では、全員が机の上のこぼれたお茶を拭いたが、椅子やコップやタオルの片付け方に差がみられた。

【考察】学生の特質として、タオル絞りやお茶を拭く等の単一の基本動作は可能だが、その状況に含まれる複数の課題に気がつかず、自分の目に入る範囲の行動に終わってしまうことが推測される。また、生活体験に影響する要因には、少子化や家族内の役割分担等の変化ではなく、生活設備の電化などの生活環境の変化があると推測された。今後は、看護系大学入学生の生活体験の特質と要因を明確にするために、対象を拡大した調査が必要である。

キーワード：生活体験、大学1年生、看護教育、少子社会、質問紙と観察

I. はじめに

少子高齢社会において国民の健康生活を支える看護職の重要性が認識され、その基礎教育の大学への移行が急速な進展をみせている。また、少子社会は大学全入時代といわれ、看護系大学でも入学定員の拡大と共に進学はより容易になっている。しかし、臨床現場から大学卒業時の看護実践能力の未熟さを指摘する声があり、文部科学省で2002年と2004年に行われた「看護学教育の在り方に関する検討会」報告において、学士課程における看護基礎教育の内容や到達目標が提示され、各看護系大学

には教育課程の改善・充実に向けた取り組みが期待されている(日本看護協会, 2005)。

さらに近年、大学全入時代に入学してくる学生の資質や能力の変化が教育分野で取り上げられている(茂里, 2007)。看護教育においては、すでに1980年代前半から看護学生の質の変化として生活習慣の変化や生活技術能力の低下があり、患者の日常生活を援助する方法である基礎看護技術の習得に影響を及ぼす現象として指摘されている(氏家他, 1983; 野々村他, 1989a)。さらに2000年頃からは、学校生活、学内演習、臨床実習で日常的にみられる問題行動と生活体験不足(萩原

受付日 2008年2月29日 受理日 2008年7月4日

1) 聖路加看護大学大学院博士後期課程, 2) 聖路加看護大学

他, 2004; 川田他, 2005) や対人関係の乏しさ(長家, 2003; 伊丹他, 2005) との関連が話題となっている。

一方, 一般の大学生の未熟性や無気力化の傾向(下山, 1995) や入学後に目標を見失う(福岡, 2000) 等がいわれる中で, 看護学科の学生は, 入学時に学習目的が明確で自己成長や看護職としての知識・技術の習得を期待するものが多い(小山他, 2004) とされる。しかし現在, 入学後の学習の中では, 雑巾を絞ったことがなくタオルを扱えない, 健康と自分の生活が結びつかない, 人の役に立ちたいと熱望しているにもかかわらず人と話ができない等の困難な状況が生じている。こうしたことから, 日常生活のあり方が激変している今日の社会では, 大学入学前に生活体験を通して獲得する生活技術や対人関係能力などの看護学の学習に必要な基礎能力がいつそう低下しており, 看護学生の入学前の学習準備状況の変化は否めず, 入学後の学習に支障をきたすことも考えられる。

よって, 看護系大学の教育の充実・改善に取り組むうえで, 少子社会・大学全入時代にある学生の, 入学前の学習準備状況に合わせた看護学導入方法を検討する必要があるだろう。しかし既存の研究では, 看護学生の生活経験・体験などの実態調査は複数あるが, 入学前の学習準備状態として対象者を看護系大学1年生に限定した研究(田島他, 1994; 小野他, 2003) はわずかであった。また, 学生の自己評価となる質問紙単独よりも実際の実技調査との併用が実態把握に近づく方法との指摘があるが(野々村他, 1989b), この10年は併用した研究はみられず, さらに実態調査を基にそれに合う教育方法を開発した研究も見当たらない。そこで看護学導入方法の開発に先駆けて, まずは看護学初学者の学習準備状況として, 日常生活における生活体験を, 自己評価の側面と実施面から調査する必要があると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は, 看護大学に入学してくる学生の日常生活における生活体験と実際の行動の実態を明らかにし, 現在の学生の学習準備状態としての生活体験の特質と要因を検討することである。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインは, 記述的研究とした。

2. 対象者

対象者は都内の私立A看護大学の入学生70名の内, 研究への参加に同意したものとした。

3. データ収集時期

データ収集は, 2007年4月下旬に行った。

4. 調査方法

協力の同意が得られた対象者に自己記入式アンケート調査を行い, 引き続き実施調査を行った。アンケート調査の指示・回収と実施調査の指示・観察は, 教員以外の調査員が行った。なお調査時間は20分程度であった。

1) 自己記入式アンケート調査

生活体験28項目と日常的に遭遇する状況に関する5項目の計33の質問と属性を問う, 筆者らが作成したものである。項目作成にあたり, まず学内演習や実習場面で学生の生活体験不足と関連する困難性を感じた事例を話し合った。次に新人看護師教育にたずさわる病棟看護師が, 生活体験不足と関連すると考えた新人看護師の困難事例について聞きとりを行った。それらを基に研究者間で話し合い, 起床から就寝までの日常生活において学生自身が体験する食事, 排泄, 清潔, 環境整備, 世話の体験, コミュニケーションに関する項目を作成した。さらに, 看護学生4名にプレテストを行い, 表現の適切性や回答可能性を確認した。

① 生活体験に関する28項目

子ども・高齢者・病人の世話, 自分や他人への料理づくり, 手洗い, 洗濯や掃除, 寝る前の着替えや消灯, 雑巾縫い, 花瓶の水替え, シーツ交換, 靴磨きや靴整理などに関する体験の有無を選択する内容とした。

② 日常的に遭遇する状況でとる行動に関する5項目

歩道一杯に横並びで歩いている人々を追い抜きたいとき, 洗面台に髪の毛が落ちており, 電車の中で携帯電話使用中に他人から注意されるなどにとる行動を複数選択肢から選択する内容とした。あてはまらない場合は自由記述とした。

③ 属性(家族構成, 同居者, 手伝いの習慣)

2) 実施調査

実施調査は, A:濡れたタオルを洗って干す, B:お茶がこぼれている机まわりを片付けるという2種類のどちらか一方を行ってもらったものであった。調査A・Bへの対象者への振り分けは, 無作為に行った。調査A・Bに対して各1名の調査員が, 観察ガイドの調査項目(指示に対する反応, タオルやその他の物品の扱い方, シンクやテーブルの周囲環境への配慮)にそって, 行動を観察した。該当する選択項目にチェックし, それ以外の行動は記録した。なお, Aの内容は「濡れたタオルがシンクのふちにだらしなく置いてあり, シンクのそばにタオル掛けがある」という状況をつくり, 対象者に対して調査員が「そこにあるタオルを水洗いして, タオル掛けに干して下さい」とのみ指示するというものであり, Bの内容は「机の上にはお茶がこぼれており, 飲みかけのコップが置かれている。椅子が半分引かれてテーブルから外

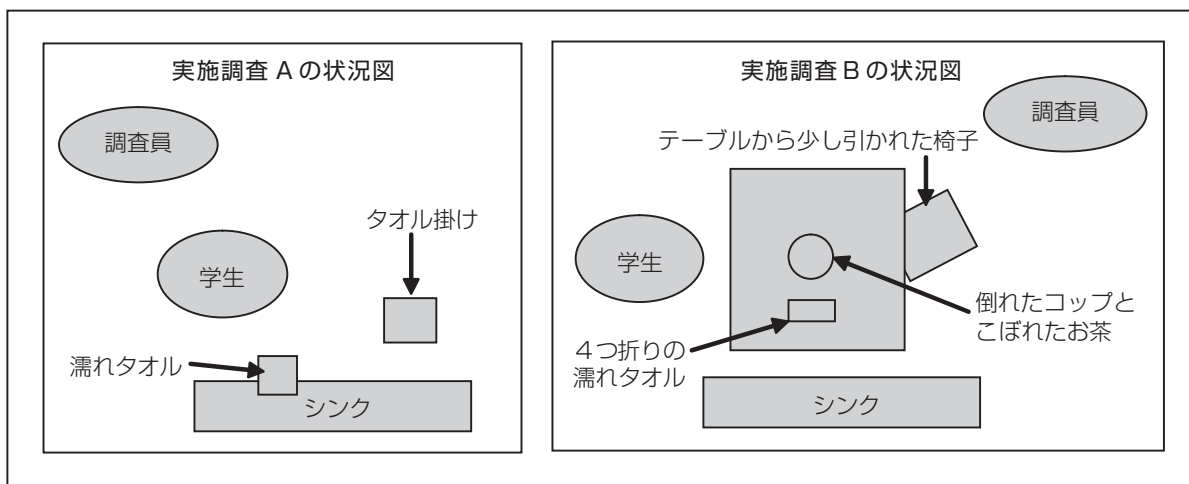


図 1 実施調査状況

に出ている。机の上に4つ折りにたたまれた台布巾が置いてある」という状況をつくり、対象者に対して調査員が「その場所を片付けて下さい」とのみ言って机のあるほうを指差すというものであった(図1)。

表 1 生活体験 28 項目の「体験あり」の回答結果

N = 31

質問	人数 (%)
食器洗い(台所の後片付け)をしたことがある	31 (100)
寝るときに着替える	31 (100)
着物(浴衣)を着たことがある	31 (100)
食べた後、口の周りに食べ物が付いたら気になる	31 (100)
自分の部屋以外の掃除をしたことがある	30 (96.8)
家のゴミをゴミ捨て場へ持っていったことがある	30 (96.8)
雑巾を使って拭き掃除をしたことがある	30 (96.8)
洗濯物をたたんだことがある	30 (96.8)
自分のために食事をつくったことがある	29 (93.5)
家族や友達のために食事をつくったことがある	28 (90.3)
自分の部屋の掃除をしている	28 (90.3)
お風呂場の掃除をしたことがある	27 (87.0)
自分だけの部屋をもっている	26 (83.9)
ふとんではなくベッドで寝ている	26 (83.9)
眠るとき電気を消す	26 (83.9)
お年寄りと生活したことがある	25 (80.6)
食事の前に手を洗う	24 (77.4)
雑巾を縫ったことがある	24 (77.4)
洗濯をしたことがある	24 (77.4)
病気の人が家族にいる。または、いたことがある	23 (74.2)
花瓶の水を替えたことがある	22 (71.0)
お年寄りの世話をしたことがある	21 (67.7)
シーツは自分で替えている	20 (64.5)
脱いだ靴はいつもそろえる	19 (61.3)
皮靴を磨いたことがある	19 (61.3)
家のトイレの掃除をしたことがある	18 (58.1)
子どものオムツを替えたことがある	13 (41.9)
浴槽に湯が入っていると、湯をかき回してから入る	10 (32.3)

5. 分析方法

データは項目ごとに集計した。また、その他や自由記載の内容はコード化して集計した。

IV. 倫理的配慮

学生が対象となるため教員の強制力が働かないように、協力依頼は用紙を配布するのみとし、調査は教員以外の者が行った。依頼用紙には、研究の目的と方法について、調査は無記名で個人特定は一切しないこと、調査へ協力したかどうかや回答内容については学業成績とは一切関係しないこと、参加の任意性と参加途中でも中断可能であることを明記した。同意書をとると対象者名がわかるため、協力の意思のあるものが実施調査の会場に来場することで同意の意思とみなした。調査会場では、対象者である学生の個人名を知らない教員以外の調査員が調査を実施し、参加の任意性と対象者の匿名性の保持に配慮した。また、対象大学の研究倫理審査委員会による承認を得て行った。

V. 結果

1. 対象者の属性

協力が得られた31名(44.2%)が対象となった。兄弟がいる学生は26名(83.9%)、一 가족の兄弟人数は0~4人、平均2.3人であった。現在一人暮らしをしている学生は6名(19.4%)であり、手伝いの習慣があるものは19名(61.3%)であった。

2. アンケート調査結果

生活体験に関する28項目の回答結果を、「体験あり」の割合の高い順に表1に示した。28項目のうち、全員が「体験あり」であった項目は、「食器洗い（台所の後片付け）をしたことがある」「寝るときに着替える」「着物（浴衣）を着たことがある」「食べた後、口の周りに食べ物が付いていたら気になる」の4項目であった。「体験あり」の割合が50%に満たなかった項目は、「浴槽に湯が入っていると、湯をかき回してから入る（10名：32.3%）」「子どものオムツを替えたことがある（13名：41.9%）」の2項目であった。

また、日常生活で遭遇する状況でとる行動（日常生活でとる行動）に関する5項目の結果を表2に示した。「人ごみの中、前から来る人と肩がぶつかりそうになったとき」は、全員が「自分からよける」であった。「歩道一杯に横並びで歩いている人々を追い抜きたいとき」の行動は、「車道に出て追い抜く」「我慢する」「声を掛けてよけてもらい追い抜く」に分散していた。「洗面台に髪の毛が落ちているとき」は、「拾って捨てる」がほとんどで、「そのままにする」「流す」もあった。「部屋に臭いがこもっているとき」の状況では、「窓をあける」が

87.1%であった。「電車の中で携帯電話使用中に他人から注意されたとき」は、「電話を切って言葉で謝る」が83.9%であった。

3. 実施調査結果

A・Bの実施調査の際の初めの指示に対する対象者の反応は、「はい」と返事をした人は29名（93.5%）で、うなずいた人は1名（3.2%）、指示を繰り返した人が1名（3.2%）であった。

1) 実施調査A

調査A「タオルを洗って干す」の対象者は15名であった。結果を表3に示した。蛇口をひねる水量に関しては「適量な水量調整をする」は14名（93.3%）、「水量が少ない」は1名（6.7%）であった。濡らしたタオルを持ったときの手の位置に関しては、「両手とも掌が上向き」は8名（53.3%）、「両手とも甲が上向き」は3名（20.0%）、「左右が反対の手の向き」は4名（26.7%）であった。タオルの絞り方については、「ねじって絞る」が全員であった。また絞る際に、一回で絞りきる場合や何度も絞る場合があった。絞り終えた後のタオルの水分の状態に関しては、「しっかり絞れている」が10名（66.7%）、「もっと絞れそうである」が5名（33.3%）であった。タオル

表2 「日常生活でとる行動」の回答結果

N = 31

質問	回答選択肢	人数 (%)
人ごみの中を歩いていて、前方から来る人と肩がぶつかりそうになったとき	自分からよける	31 (100)
	相手がよけると思う	0 (0)
自分の前を、歩道一杯に横に並んで歩いている人々がいて追い抜きたいとき	車道に出て追い抜く	11 (35.5)
	我慢する	9 (29.0)
	声を掛けてよけてもらい追い抜く	8 (25.8)
	その他（隙間ができたなら追い抜く）	1 (3.2)
	その他（声を掛けずに通り過ぎる）	1 (3.2)
	その他（「車道に出て追い抜く」と「声を掛けてよけてもらい追い抜く」の間）	1 (3.2)
洗面台に髪の毛が落ちているとき	拾って捨てる	23 (74.2)
	そのままにする	4 (12.9)
	気がついたことがない	0 (0)
	その他（流す）	3 (9.7)
	その他（自分のものなら拾う）	1 (3.2)
部屋に臭いがこもっているとき	窓をあける	27 (87.1)
	時間がたつと気にならなくなるので、そのまま	2 (6.5)
	その他（消臭剤やスプレーを使用）	1 (3.2)
	その他（窓を開ける、スプレーをする）	1 (3.2)
電車の中で携帯電話を掛けていたら注意されたとき	電話を切って言葉で謝る	26 (83.9)
	電話を切って目で謝る	3 (9.7)
	そのまま電話している	0 (0)
	その他（黙って切る）	1 (3.2)
	その他（そもそも電話しない）	1 (3.2)

は全員が“広げて伸ばす”が、“しわがあるまま”が2名(13.3%)いた。タオルの干し方は、“まっすぐ干す”は14名(93.3%)、“長さがおおよそそろっている”12名(80.0%)“斜めに干す”人が1名(6.7%)であった。濡れたシンクのふちを拭くかどうかでは、“拭かない”が14名(93.3%)であった。

2) 実施調査B

調査B「机まわりを片付ける」の対象者は16名であった。結果を表4に示した。机の上を拭くことに関しては、“こぼれたお茶の部分を拭いた”のは全員で、そのうちで“2度拭いた”が10名(62.5%)いた。拭いた後の台布巾の片付けに関しては、“水でゆすいで絞る”が12

名(75.0%)、“水でゆすがず絞る”が2名(12.5%)、“何もしない(片付けない)”が2名(12.5%)、またその中でその他の項目として“絞った後、たたまずグシャッとしたまま元の位置に置く”と“シンクのふちに広げて掛ける”が各1名(各6.3%)みられた。机の上のコップの片付けに関しては、“コップをお茶のこぼれていないテーブル上に置きなおす”は13名(81.3%)、“シンクの上に移動させる”は3名(18.8%)であった。椅子の片付けは、“そのまま”が10名(62.5%)、“きちんと机の中に入れなおす”が5名(31.2%)“中途半端に入れる”が1名(6.3%)であった。

表3 実施調査A：「タオルを洗って干す」

n = 15

調査項目	観察項目	人数 (%)
蛇口をひねる水量	適量な水量調整をする	14 (93.3)
	水量が少ない	1 (6.7)
	水量が多い	0 (0)
濡らしたタオルを持ったときの手の位置	両手とも掌が上向き	8 (53.3)
	両手とも甲が上向き	3 (20.0)
	左右が反対の手の向き	4 (26.7)
タオルの絞り方	ねじって絞る	15 (100)
	ねじらずに握って絞ろうとする	0 (0)
	たたんで両手で挟んで押す	0 (0)
絞り終えた後のタオルの水分の状態	しっかり絞れている	10 (66.7)
	もっと絞れそうである	5 (33.3)
タオルの広げ方 (複数回答)	広げて伸ばす	15 (100)
	しわがあるまま	2 (13.3)
タオルの干し方 (複数回答)	まっすぐ干す	14 (93.3)
	長さがおおよそそろっている	12 (80.0)
	斜めに干す	1 (6.7)
濡れたシンクのふちを拭く	拭かない	14 (93.3)
	拭く	1 (6.7)

表4 実施調査B：「机まわりを片付ける」

n = 16

調査項目	観察項目	人数 (%)
机の上を拭くこと (複数回答)	こぼれたお茶の部分を拭いた	16 (100)
	2度拭いた	10 (62.5)
拭いた後の台布巾の片付け (複数回答)	水でゆすいで絞る	12 (75.0)
	水でゆすがず絞る	2 (12.5)
	何もしない(片付けない)	2 (12.5)
	絞った後、たたまずグシャッとしたまま元の位置に置く	1 (6.3)
	シンクのふちに広げて掛ける	1 (6.3)
机の上のコップの片付け	コップをお茶のこぼれていないテーブル上に置きなおす	13 (81.3)
	シンクの上に移動させる	3 (18.8)
いすの片付け	そのまま	10 (62.5)
	きちんと机の中に入れなおす	5 (31.2)
	中途半端に入れる	1 (6.3)

VI. 考察

看護大学入学生 31 名に対して質問紙調査と実施調査を行った。以下に今回対象となった看護大学入学生の生活体験の特質と要因を考察する。

1. 入学生の生活体験の特質

近年、看護学生の生活体験不足がいわれ、その例として「びしょぬれの雑巾をそのまま使おうとする（松下他,2002）」「タオルが絞れない（小野他, 2003）」「環境整備時に雑巾をうまく絞ることができず、床やテーブルを水浸しにしてしまう（川田他,2005）」等が指摘されてきた。しかし、今回はアンケートの生活体験に関して多くの学生が経験していると捉えており、田島ら（1994）による看護系大学入学生に行った体験調査において、日常生活の過程で習慣的に行われている行動は大半の学生が経験していたとの結果と同様であった。また実施調査による実際の行動から、今回の学生の多くはタオルを絞って干す行動とテーブルの上のお茶を拭くという単一の動作は実際にできることが示された。つまり、学生の生活体験の全体的な不足によってタオルや雑巾が絞れない等とはいえない、と考える。

また実施調査Bの「片付け」の指示に対しては、全員お茶を拭く点は共通したが、コップや椅子の片付けやタオルの扱い方はばらつきがみられた。こうした日常生活でとる行動内容は、具体的な方法や行なう範囲に違いがあることが推測できる。「片付け」は看護では環境整備のひとつである。環境整備をできない学生や時間がかかる学生がいる（川田他, 2005）という指摘があるが、片付けの範囲にばらつきがみられた今回の結果はこれを裏付けるものであった。筆者らの体験でも、例えば、「ベッド周囲の片付け」にベッド上やオーバーテーブル上の片付けを含めるが、床頭台や床のスリッパの片付けは含めないと捉える学生もおり、教員が演習や実習で感じる困難性がわかる結果であった。

以上から、学生は生活体験に関する項目の大半は経験があると捉えており、実際にタオルを絞って干すことやこぼれたお茶を拭く等の単一の基本動作は可能だが、その状況に含まれる複数の課題に気がつかず、自分の目に入る範囲の行動に終わってしまうことが推測される。

次に、コミュニケーションに関して考察する。歩道を歩く人々を追い抜きたいときに「声を掛けて追い抜く」という言葉によるコミュニケーションをとるものが約1/4を占めたが、社会的な場におけるコミュニケーションの希薄さが現代学生の特徴（萩原他, 2004）といわれるように、残りは直接的な接触を避ける回避型という特質がうかがえる。また、携帯電話注意時に8割が言葉で謝るという結果や、行動調査の指示への反応としてはほぼ全員が返事を返したことから、対人関係における基本的マナーは備わっており、必要最小限のコミュニケー

ションは可能であることが推測される。

2. 生活体験の有無に関する要因

今回対象の学生の8割には兄弟が平均2.3人おり、少子社会といわれる中でも家庭内の子どもの数は少なくはない。萩原ら（2004）は年少の兄弟のいる学生の経験率の高さを示しており、兄弟の数だけでは一概に生活体験の有無を判断できない。さらに、家庭内の役割分担に関して、1980年代から受験勉強が優先されるため家事分担は消極的（氏家他, 1983）といわれてきたが、今回は掃除や洗濯、片付けなどの大半は体験してきた。このように学生の生活体験の状況は、単に家庭内の高齢者・兄弟の有無や役割だけではなく、他の要因も考えなければ説明できないことが推察される。

“湯をかき回す”“トイレ掃除”の体験率が低い点については、生活設備の面から考察する必要があるのではないだろうか。以前の風呂は入る前に湯をかき混ぜなければ温度が一定に保たれなかったが、近年では自動の温度調整機能が装備された風呂が普及し始め、そもそも入浴前に湯をかき混ぜる習慣がないことが考えられる。同様にトイレにも自動洗浄機能や汚れにくい素材が使われており、排泄後にトイレ掃除を行う機会が少ない環境の中で生活しているのかもしれない。時代によって生活の簡便化や動作の簡略化があるが、掃除機や洗濯機の家事の機械化による手先の動作の低下（野々村他, 1989a）という状況は、今では風呂やトイレの自動化へと拡大し、湯の温度に気づくことやトイレの汚れに気がつくことさえできない状況をもたらしている。手先の動作の変化に加えて、現在では温度や清潔に関する感覚や認識の変化が生じていることも、現代の学生の特質と考えられる。こうした生活設備が自動化された環境で生じる学生の特質は、自宅と異なる設備をもつ医療現場においては、例えば入浴援助の際にお湯の温度を確かめることが意識的にできなければ、患者の火傷というインシデントにつながるものが危惧される。

以上、過去には核家族化や少子化という社会構造や家族内の役割分担等が学生の生活体験に影響する要因といわれてきたが、それ以外に生活設備の電化などの生活環境の点があると考えざるを得ない。

3. 限界と課題

今回の結果は、対象となったA大学の学生に限定されることであり、また対象者数の少なさから、一般化するには限界がある。また、今回の調査項目だけでは、学生が日常で実際に行っている方法や範囲を把握することが不十分であり特質や要因のすべてが明確になったといえない。今後、対象を拡大して全国調査を行ない、看護系大学入学生の特質とその要因を明確にしたいと考えている。そのうえで、それを踏まえた教育方法を考え、看護学導入時の教育プログラムを開発する予定である。

VII. 結論

看護大学入学生 31 名に対して質問紙と実施調査を行った結果、生活体験と実際の日常生活でとる行動の実態として下記の点が示された。

1. 兄弟がいる学生が多かった。

2. 生活体験に関して、大半の項目は体験があると捉えていたが、トイレ掃除、お風呂のお湯をかき回す、子どものオムツ交換という一部の体験は少なかった。

3. 実際の行動に関して、タオルを絞って干す行動と、こぼれたお茶を拭く行為は多くの学生はできたが、一方で「片付ける」範囲や内容には差が生じた。

さらに学生の生活体験や行動の特質と要因に関し、下記の点が考察された。

1. タオル絞りやこぼれたお茶を拭く等の単一の基本動作は可能だが、その状況に含まれる複数の課題に気がつかず、自分の目に入る範囲の行動に終わってしまうことが推測される。

2. 対人関係における基本的マナーは備わっているが回避型であり、必要最小限のコミュニケーションとなる傾向がうかがえる。

3. 学生の生活体験に影響する要因には、少子化や家族内の役割分担等の変化ではなく、生活設備の電化などの生活環境の変化があると推測された。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。なお本研究は、平成 19～22 年度文部科学省科学研究費補助金助成を受けた研究（菱沼典子：「少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発」基盤研究 B）の一部であり、第 27 回日本看護科学学会学術集会にて発表しました。

引用文献

江田純子, 清川浩美, 野村志保子 (1995). 1994 年度本学入学生の入学時における生活経験・学習に関する調査. *聖隷クリストファー看護大学紀要*, 3, 93-108.

福岡欣治 (2000). 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向一達成動機を媒介要因とした検討一. *静岡県立大学短期学部研究紀要*, 14 (3), 1-10.

萩原美樹, 山本真紀子, 矢野恵子 (2004). 臨地実習前の看護学生の生活体験に関する実態調査. *三重看護学誌*, 6, 91-96.

伊丹君和, 亀澤里恵子, 河合小百合, 他 (2005). 看護

学生における生活体験・対人関係の実態と他者意識との関連. *日本看護学会論文集 第 36 回看護教育*, 36, 209-211.

川田智美, 木村由美子, 小暮深雪, 他 (2005). 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面. *群馬保健学紀要*, 26, 133-140.

小山真理子, 植村由美子, 藤原ゆかり, 他 (2004). 看護学生の大学入学時の学習への期待および看護・看護職についての認識. *神奈川県立保健福祉大学誌*, 1 (1), 85-94.

松下由美子, 辻あさみ (2002). 看護短期大学生の生活体験の実態—単身生活者と同居生活者の比較検討から—. *日本看護学会論文集 第 33 回看護教育*, 33, 12-14.

長家智子 (2003). 看護学生のコミュニケーションに関する研究—生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて—. *九州大学医学部保健学科紀要*, 第 1 号, 71-82.

日本看護協会編 (2005). *平成 17 年版看護白書*. 東京: 日本看護協会出版会.

野々村典子, 中川克子 (1989a). 看護系大学生の日常における手指の動きと家事経験. *日本看護学会論文集 第 20 回看護教育*, 20, 240-242.

野々村典子, 中川克子 (1989b). 学生の日常における生活技術調査—手指の動きの実技を中心に—. *看護教育*, 30 (4), 234-238.

岡野理恵, 平山純子, 宇藤真由美, 他 (1990). 看護学生の生活技術能力に関する実技調査. *日本看護学会論文集 1 第 21 回看護教育*, 21, 46-48.

小野晴子, 土井英子, 杉本幸枝, 他 (2003). 短期大学生入学初期の生活習慣獲得の実態. *新見公立短期大学紀要*, 24, 35-41.

大日向輝美, 三尾弘子, 八木順子, 他 (1990). 看護系大学生の生活技術と生活行動の実態. *日本看護学会論文集 第 29 回看護教育*, 29, 132-134.

茂里一紘 (2007). 現場で考える「全入時代」. *IDE 現代の高等教育*, 491, 52-55.

下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究. *教育心理学研究*, 43 (2), 33-43.

田島桂子, 清川浩美, 野村志保子 (1994). 看護大学入学時における学生の学習レディネスに関する事前評価看護行動と関連する生活経験と学習をめぐる内容を中心に. *日本看護学教育学会誌*, 4 (1), 19-34.

氏家幸子, 阿曾洋子 (1983). 学生の入学時の生活関連動作と看護実習の実態. *日本看護学会論文集 第 14 回看護教育*, 14, 281-284.

Daily Life Experience of Freshmen at a Nursing College

Kumiko Ohashi

(St. Luke's College of Nursing, Doctoral Course)

Michiko Hishinuma, Yumi Sakyo, Nobuko Okubo

Akiko Ishimoto, Sumiko Satake

(St. Luke's College of Nursing)

Purpose: Recently, focus has been put on daily life experience of nursing students and how it might support their learning. However, there are few studies on nursing students' daily life experience in relation to readiness for nursing. The purpose of this study was to investigate daily life experience and actual behaviors of freshmen at a nursing college and to discuss their characteristics and factors affecting their daily life experience.

Methods: Thirty-one first year students (freshmen) responded to a 33-item questionnaire about their behaviors in everyday life that might be relevant to nursing and then carried out one of the two practical tasks: A) "wash a towel and hang dry" or B) "clean up the area around the desk." Actual behaviors during the task were observed and recorded using a guide by an investigator. Data were quantitatively and descriptively analyzed.

Results: Most students (83.9%) had one or more siblings. All students had experience of four behaviors: dishwashing, changing into nightwear, wearing a Japanese kimono and paying attention to food particles around other people's mouths. Fewer than 50% of the students had experience of two behaviors: stirring warm water before taking a bath and changing diapers. For task A (n=15), almost all students gave a twist to wring the towel and then smoothed it out and hung straight. For task B (n=16), all students wiped up spilled water on the desk. However, there were differences in their approach when cleaning up the chair, the cup or the towel.

Discussion: It is supposed that although freshman can do a single basic action, like wringing a towel or wiping up water, they may not be able to notice multiple problems included in the situation, and therefore, they may only deal with of the problem within their sight. We think that modern living environment is a factor affecting daily life experience. As the number of samples in our research was small, further research to identify the characteristics of freshmen and factors influencing daily living behaviors is suggested.

Keywords : daily life experience, freshman at college, nursing education, society with a decreasing birthrate, questionnaire and observational methods